

急(3・3) 「曾根崎心中 千秋楽」 ～曾根崎の森～

太夫3 しんと鎮まる午前二時【午前二時】

物音ひとつせぬように、店の扉をそろそろと開けて、
(ドタドタと大きな物音。太夫3、顔をしかめて)
外へ飛び出す影ふたつ。【影ふたつ】

ドタバタと、お初、徳兵衛、登場。

どちらも人形が主体的に動き、フミと宗輔はそれに引っ張られている。

徳兵衛 ほら、歩いてるでー。どうや、歩いてやろー？

お初 はい、しっかり歩いてます。

徳兵衛 これで、もうどこでも行ける。お初と一緒にどこへでも。

お初 (徳兵衛と顔を見合わせ) ああ、うれしい！

宗輔 一体どうなってるんだ。全然いうこと聞かない

フミ まるで生きてるみたい

太夫3 (怒りが頂点に達し) いい加減にして！

フミだけじゃなくて宗輔もなの？！

宗輔 違います。本当に人形が勝手に！

太夫3 (治めるため必死に) 私が決めたことが気に入らないのはわかった。

でもいくら文句を言ったところで、もう仕方ないの。そうでしょ。

宗輔 ……はい……わかってます……でも

太夫3 なに？

宗輔 いえ……

太夫3 フミは？言いたいことがあるなら言ってみなさい！

フミ (何も言えず、ただ悔しさをかみしめる)

太夫 3

（ため息）ともかく、今は、この舞台に**集中**。
（太夫セリフに戻る）

ああうれしいと、死にゆく身を喜ぶ、哀れさよ。【哀れさよ】

お初

（太夫3を見つめ）残念やけど、うちも、徳兵衛さまも死にません。

太夫 3

だから！

徳兵衛

なあお初・・・ずっと考えとったんやけど・・・、

俺は、いまや罪人の汚名を着せられた身。

この先どこへ逃げたとしても、まともな暮らしなんぞできへん。
せやから・・・やっぱり・・・ここは、潔く死んだ方が

お初

徳兵衛さま・・・？

フミ、気持ちが無えられず人形を投げ出し、うずくまる

宗輔

（フミにかけより）フミちゃん、気持ちはわかるよ。

俺だつてここが無くなるのはつらい。でも、仕方がない、そうだろう？
だったらせめて、今日、最後、綺麗に終わりを迎えよう。

徳兵衛

曾根崎の森で二人、美しう最後を迎えて終わり。それでええ。

お初・フミ

（声を張って）はああ？美しく？最後を迎えて？終わり？？

そんなんで、ほんまにええんかああああ！！！！

宗輔

え・・・それ、どっちのセリフ！？

フミ

本当にそれでいいの！？私は**嫌**！

いくら仕方がないって言われても、受け入れろって言われても、
やっぱり嫌なの！

みんなは違うの！？本当はまだまだ続けたいんじゃないの！？
ねえ！ねえ！ねえ！！

太夫 3

ありえない・・・舞台の上で・・・大声で取り乱すなんて・・・

宗輔

**・・・ありえない・・・そうか！（何かに気が付き舞台全体を俯瞰して）
ありえないからこそ・・・何とかなるかもしれない。**

太夫3 何を言ってる!?

宗輔 (フミの傍に行き) フミちゃん、人形たちを救ってあげよう。
・・・僕たちが続けるために!

フミ 宗輔さん・・・?

宗輔 きつと・・・曽根崎心中ができた時も、それまでの伝統には収まらない、
こんな真つ直ぐなメッセジが、たくさんの人々の心に突き刺さったんだ。
そうだよね。

フミ そう、それで若い人の間で心がズムになつて

宗輔 こまった幕府は、上演禁止のお触れまで出して。

フミ こんな舞台は不謹慎だ
上戸 それが今じゃ伝統芸能。 って。

宗輔 伝統を守るのは大事だ・・・だけど・・・時には
破ってみることも必要なかもしれない。

フミちゃんと・・・そして人形たちが、それに気付かせてくれた、
そんな気がする。

二人、それぞれの人形を見つめる。

お初 きつと・・・大丈夫です。

徳兵衛 お初

お初 家も、仕事も、身分も、そういったもんを全部捨てても、胸の中の
熱いもんを守っていれば、きつと新しい道が開ける。そんな時代が来る。
うちの未来がそう言うてるような気がするんです。 さあ。

人形遣い、それぞれの人形と視線を交わし、ゆっくりと人形の後ろに着く。

太夫3 まちなさい! 私の劇団、私の舞台、私の守ってきたものを
これ以上滅茶苦茶にはさせない!

(太夫セリフを続ける)

この夜ばかりは長くあつてと願えども、無常に短い夏の夜。【夏の夜】
死をせまるように鳴く鳥の声。【鳥の声】(こども鳥の鳴き声)

徳兵衛 （空を見上げ）夜が明ける前に、ここを抜け出さんと。

太夫3 そういつて、たどり着いた曾根崎の森【曾根崎の森】

お初 あああ、いや！

徳兵衛 （一本の木の前。じっと木を見つめ）よし。（お初に）帯を

お初 徳兵衛さま？まさか・・・（やつぱり死ぬ気？）

徳兵衛 ここからは、お前と俺は一身同体。決して離れぬよう、帯で体をしっかりと結び付け・・・大阪の街を抜け出すで！

お初 はい！

帯を取り、二人、お互い自分の体に結び付ける

徳兵衛 よう締まったか？

お初 はい、締めました。

徳兵衛 さあ、行くで。

太夫3 （台を降り）どこにも行かせない！あなたたちはそこで心中をするの！
（袖の太夫に）ちよつと来て、人形たちを止めて！

袖から、太夫1、2が登場。徳兵衛とお初にゆつくりと近付く。

徳兵衛 いかん、逃げるで。

駆け出す徳兵衛とお初。あわててその方向に回り込む太夫1

フミ 危ない！

フミと宗輔の遣いで、人形たち、間一髪方向を変えて太夫をかわす。
滑ってこける太夫1。

太夫3 何をやってるの、そつちよ。早く。

しばらく、徳兵衛とお初と太夫1、2の追いかけあいが続く。

お初と徳兵衛も、床に足をとられコケそうになりながら、太夫をかわしていく。

フミ

(逃げながら) ねえ、待って！**聞いて。**

人形たちが、必死に今日を変えようとしているの。

太夫1、2に挟まれて、中央の木の前に追い詰められる二人。

太夫3

そう・・・そのまま、そこで二人は最後を迎えるの！

フミ

お願い・・・

宗輔

(太夫1を指して) 和香ちゃん！あのセリフ！

太夫1

え・・・あ・(太夫口調で)と、そこへお初の客を乗せた駕籠がやってきた

太夫3

は？

太夫2

アホ！・・・もつと腹から声出せ。

(姿勢を正し) 駕籠がやってきた

袖から慌てて駕籠が登場。駕籠にお初と徳兵衛が乗り込もうとする

太夫3

馬鹿な！あなたたちまで、何で！？

駕籠を慌てて捕まえに行く太夫3。

その前に九平治が駆け込んでくる。半二もそれに無理やり引っ張られる。

九平治

(太夫3を止めるポーズで) 待てい！ここから先はわしが行かせへん。

太夫3

え・・・お、おい・・・(半二に) どういうことだ！

九平治

たまには正義の味方をやってみたかった！

(半二を見て) だろ？

半二、驚いて、そして、その気になって

九平治

さあ、徳兵衛、お初、ここはわしに任せて、とつとと逃げるんや！

これより先へは、あ、行かせねえええ(見栄をきる)

太夫2 (九平治の見栄に苦笑し) そうして駕籠は二人を載せて

太夫1 (太夫2にうながされ) あ・・・えつと・・・

(苦し紛れに) 光よりも早く飛び去った!

太夫1の言葉に、驚いて顔を見合わせる4人(宗輔、フミ、太夫1、太夫2)

宗輔 (うなずき、三味線弾きを指し) 音楽!

三味線弾きが立ち上がって、激しい音楽を弾く

4人 (顔を見合わせうなずき) せーの、はあああああー! ! ! ! !

お初と徳兵衛を載せた駕籠を宗輔、フミ、太夫1、太夫2が抱えて退場。

太夫3 (木の前に崩れ落ち) あああ・・・終わった・・・

半二 あ・・・なんか・・・変な空気だから・・・とりあえず去りましょう

半二、九平治とともに退場しようとする

九平治 痛あああ!

急に動いたから・・・体が、痛うて・・・あああ、痛い痛い・・・

半二、九平治退場。

一人残され、木の前に座り込んだまま、茫然自失の太夫3

太夫3 (我に返り) ああ、その・・・なんというか・・・すみません!

(客席に頭を下げる)・・・今夜は我々の最後の舞台。来ていただいた皆様に、我々の集大成をお見せしようと思っていたのに・・・

もう・・・こんな無茶苦茶で・・・これで終わりだなんて・・・

何とお詫びをしていいか・・・(悔しさと申し訳なさで言葉に詰まる)

こどもたち、登場

スミちゃん ねえ、早く、最後、しめて

太夫3 え・・・

タキちゃん 太夫さんがしめてくれないと、私これ、たたけないよ

スミちゃん 義江ちゃん、いつも言ってるよね。

舞台は太夫の言葉ではじまって、太夫の言葉で終わる。

タキちゃん

途中でどんなに舞台がおかしくなっても、太夫が最後
きちんと締めれば、全てまーるく納めることができるって。

太夫3、舞台を見て、客席を見て、ゆつくりと自分のいつもの位置へ戻る

太夫3

（咳払い）こうして曾根崎の森の下、光よりも早く飛び去った
二人の姿は、誰が告げるともなく風にのってうわさが広まり、
これより先の多くの人の、「新しい」恋の手本となりました。

太夫3、観客に深々と礼。

拍子木とともに暗転

暗転の中、スライド投影。タキちゃんとスミちゃんて読み上げる。

スライド こうして、この日お披露目された新しい演目、

曾根崎心中（全員で）破っ！

は、世間の評判となり、

お客様もどんどん増えて、

劇団がつぶれる話もなくなった、ということです。

めでたし、めでたし。